

福島の 児童文学者15

『宮本百合子』

郡山市の青年会議所が、同市内の中学生から応募された創作小説や詩などを対象に選ぶ文学賞がある。郡山市ゆかりの二人の作家から名前を採ったものであるが、男子に贈られるのが久米正雄に因んだ「久米賞」。女子に贈られるのが、今回のテーマ宮本百合子に因んだ「百合子賞」である。

宮本百合子は郡山を舞台に『貧しき人々の群れ』を書き、十七歳で文壇デビューを果たしたプロレタリア文学の代表的作家である。しかしその百合子が、子どものための作品を書いていることはあまり知られていない。そこで、これら作品を通し、児童文学者・宮本百合子の足跡を追ってみたい。

明治三十二年、父精一郎、母葎江の長女として東京小石川に生まれる。本名を中條ユリという。既に五歳の頃、父の本棚から『文芸倶楽部』や『新小説』『女学雑誌』などを取り出して眺めていたと言う。

小学校の時分から天才とうたわれていたが、高等女学校に進んでからも、その才能は他人の認めるところであった。特に国語科の成績は抜群であったが、最初の頃は音楽の好きな少女であった。しかし、文章を書くことに興味を抱き始めてからは、『竹取物語』や『平家物語』『雨月物語』などといった、『近松』『西鶴』の作品を口語訳に書き直したり、また五年の時には、与謝野晶子の『新釈源氏物語』をまねて、『錦木』という小説を書いたり、その才能を遺憾なく発揮するようになっていった。その後の作家としての百合子はご承知のとおりである。

〔百合子と福島〕

祖父・中條政恒は安積開拓事業に従事し、今の郡山市に住んでいた。その関係で度々郡山を訪れており、十歳位からは、毎年夏休みを祖母と共に過ごしている。

この地での人々の生活や牛馬の姿、山々や草花の匂いなどは、彼女の中に強く印象づけられ、その後、トルストイの作品に触れ感動した心は、この時の自然の感動を、何かの形として描きたいという衝動に駆られていった。この時百合子十六歳。「農村」と題し完成したこの作品は、彼女の人生を決定するものであった。

坪内逍遙らに認められ、「貧しき人々の群れ」(改題・前出)として『中央公

論』に掲載。無名少女の作品として大変評判となり、華々しい文壇デビューとなった。また一年後には、芸術的にも社会的にも前作を越えたと評価されている。『福宜様宮田』を書いている。この作品もまた、郡山の農村を題材としたもので、当時の農村や貧しい農民事情を切々と訴えている。

〔百合子と児童文学〕

百合子が子どものために書いた作品としては、次の九編(作品総数としては十編)がある。

・「いとこ同志」：父母と死別した娘と、引取先のいとこの女の子との友情を描いた通俗的な少女小説。
大正九年『女学生』

・「アメリカの少年」：アメリカ滞在をもとにした随筆ふうの作品。
大正十一年『少年倶楽部』

・「印度哀話 啞娘スバー」：タボール原作を翻訳したもの。
大正十二年『少女倶楽部』

・「二つの短い話」：「笛吹きブカ」と「ヂェラルド太守の魔法」の二つの話からなる。翻訳、あるいは再話作と思われる。大正十三年『週刊朝日』

・「ソヴェートのピオニールはなにをして遊ぶか」：ピオニール(少年団)を紹介したもの。
昭和六年『少年戦旗』

・「ペーチャの話」：ソ連のピオニールを素材に書いた作品で、少年ペー

チャが集団農場設立のために母親をも捨てる話。

昭和六年『少年戦旗』

・「キューリ夫人の命の焰」

昭和十四年『少女の友』

・「自分を知らないこと」

昭和十六年『少女の友』

・「美しく豊かな生活へ」

昭和二十年『少女の友』

プロレタリア文学では輝かしい作品群を残した宮本百合子も、児童文学の世界では、それほど才能を見せてはいない。自身、「子どものために小説風なお話を書きたいと思わない」と話している。しかし百合子の作品は、従来のお伽噺とは全く異なった、子どもの日常生活そのものを題材として取り上げているのが特徴であり、当時の新しい児童文学の流れと同じものであった。その上、当時は正確に伝えられていなかったソ連の事情を、留学した彼女が、こうした形で伝えたことは大きな意義がある。

宮本百合子の児童文学に関する研究は、作品・評論にとどまっている。プロレタリア児童文学を解明するためにも、この分野の研究が望まれる。

※参考文献

・『宮本百合子全集』(新日本出版社)
「宮本百合子の児童文学」

・『国文学解釈と教材の研究』
「川をわたる歌声」(新日本出版社)